＃子育て処方せん

特性に合った指導を

子どもを取り巻く病気や疾患などについて、福岡市立こども病院の医師が解説する「＃子育て処方せん」。今回は、こころの診療科の科長を務める宮崎仁医師に、発達障害の一種である学習障害について聞いた。

学習障害

宮崎仁医師

学習障害はLD（Learning Disorder）とも呼ばれ、知的障害がないにもかかわらず、読む、書く、計算するなどがうまくできず、学業が学年相応に達成できない症状を指す。情報を処理する中枢神経系に何らかの異常があることが原因とされる。

学習障害のある人は、文字と読みの音とを一致させるのに苦労するケースが多い。文を単語のまとまりごとではなく、1文字ずつ読み上げたり、頻繁に読み間違えたりする。数字を読み取るのが苦手で、計算に時間がかかることもある。文を書き写すのが遅かったり、左右が逆の「鏡文字」と呼ばれる文字を書いたりする子もいる。

独立行政法人・国立特別支援教育総合研究所などが国の協力の下で運営するウェブサイトでは、国内で読み書きに難がある人の割合は少なくとも2～3％としている。今のところ有効な治療法や治療薬はなく、大人になるにつれて治っていくものとも限らない。

症状の有無は、世界保健機関（WHO）や米国の精神医学会の診断基準に基づき、実際の学習上のつまずきなども踏まえ、総合的に判断する。医療機関や各自治体の教育センターなどで検査を受けて、症状があると分かった場合、大切なのが、無理をして苦手なことを克服させようとしないことだ。人一倍の努力を強いると、多くの場合、勉強自体を嫌いになってしまう。

読み書きが苦手でも、タブレット端末で音声教材を用いて学習するなどして、知識を得ることはできる。家族や教師、周囲の人は、その子が無理なく、特性や好みに合ったやり方で学力を伸ばせる教材や指導方法がないか、探ってほしい。

（聞き手・大森祐輔）

学習障害（LD）により5～6歳で見られる特徴の一例

- □ 文字を読むことに関心がない
- □ 単語の発音を正確に言えないことがある
  - エレベーター→エベレーター、クリスマス→クスリマスなど
- □ ことばを言いながら一音一歩ずつ移動するなどの遊びができない
  - 「ぐ・り・こ」の遊びなど
- □ 歌の歌詞を覚えることに苦労する
- □ 文字を書きたがらない。書くことに関心がない

※厚生労働省「吃音、チック症、読み書き障害、不器用の特性に気づく『チェックリスト』活用マニュアル」を基に作成

読み書きに「難」国内2～3％

災害時の「食」親子で備える

子どもがいる家庭にとって、災害時の心配事の一つが食事。2016年の熊本地震を経験した防災士らでつくるNPO法人ソナエトコ（熊本市）は、冷蔵庫を「備蓄庫」として活用するなど普段からできる備えを勧めている。

「冷蔵庫に何が入っているか、思い出しながら描いてみましょう」

2月上旬、熊本県防災センター（熊本市）で、小学校低学年までの子どもと保護者向けに開かれた「防災ひろば」。同法人の防災士で食育防災アドバイザーの高智穂さくらさん(41)が呼びかけると、参加した親子が紙に描き出していった。

「キャンディレイ」を作る子どもたち

高智穂さんは、常温で備蓄した食料を使う前に、冷蔵庫にあるものを組み合わせて何食分か賄えると説明。停電になってもドアを開けなければ3時間は保冷できるため、「普段から中に何が入っているか把握しておくことが大事」と呼びかける。冷凍室は氷や食材を隙間なく詰めておくことで、冷たさを長持ちさせることが可能という。

子どもたちは、細長いポリ袋にあめ玉を詰めて首飾りのようにした「キャンディレイ」も制作した。玄関付近につるしておくと、非常食として持ち出せるという。母親や妹と参加した市内の小学3年、野元実由樹さん(9)は「災害があったら、お守りとして持って行けそう」と話していた。

「＃子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syaka1@yomiuri.com）へお願いします。

インタビューの動画はQRコードを読み込んでください